

日本労働年鑑 戦後特集(第22集)
The Labour Year Book of Japan post war special ed.

第二篇 労働組合

第三章 労働組合運動

第六節 示威運動(つづき)

10、吉田内閣打倒危機突破国民大会

一九四七年一月廿八日・宮城前広場

この大会は二・一ゼネストを目前にした緊迫した情勢下に昭和二二年一月二八日午前十一時から東京はじめ各地でいつせいにひらかれた。東京ではまず司会者亀田東伍氏(産別)のあいさつのち、議長に加藤勘十氏(社会党組合委員会)副議長に土橋一吉(全官公)島上善五郎(総同盟)花塚正吉(日労)の三氏を推した。

加藤議長は「いまやわれわれの前には民族の危機が迫っている。吉田反動内閣はわれわれが昨年十二月十七日に全勤労大衆の名において、即時退陣を要求したのにもかかわらず、その勢力保持のためにきゆうきゆうとし、その後なにもしていない。この危機の突破は決して反動内閣にはできるものでなく、真の民主政府の樹立によつてなしとげられる。われわれは吉田内閣打倒に勇進せねばならぬ」と叫び、ついで土橋副議長が登壇、全官公庁の固い団結をつたえ、「最低賃金制の確立」「吉田亡国内閣打倒」「社会党中心の民主政府樹立」などのスローガン三十を決定、全日通はじめ十六参加団体代表の演説ののち別項の大会決議、同宣言を可決、全官公庁共闘委員会の名で声明が行われた。この間「三派連立内閣反対」「世界労組連盟への代表派遣懇請」の緊急動議が出てこれを採択、「実行委員会」に一任することにし、さらに米窪、野坂両代議士の激励演説が行われた。

かくてメーデー歌とともに午後一時大会を終り、宮城前—首相官邸—宮城前、宮城前—日本橋—上野公園の二つのコースに分れデモ行進に移り、同三時すぎ解散した。なおこの日大会各代表は首相官邸、警視庁にいたり、首相と警視総監に決議文を手交した。

決 議

吉田内閣は勤労大衆を窮乏のどん底につき落とし、わが国の全産業の機能をマヒ状態に陥れた。本大会は勤労大衆の生活を安定せしめ、現下の経済危機を打開するため吉田反動内閣の即時退陣を要求する。

宣 言(要旨)

無謀なる侵略戦争がまねいた生産の破壊を復興し民族経済を再建するの基礎はわれわれ勤労階級の働く力にあることを深く信ずる。しかるに吉田内閣はあくまで支配的金融資本家擁護のために、われわれの一方的犠牲によつて生産を復興せんとし、自ら

三月キキを呼号し、インフレをあおり、石炭キキをはじめとする全産業のキキを深め、全勤労者階級を窮乏のドン底に追い詰めつゝある。全官公庁労組級を中心とすニ・ーゼネストこそはまさにこのキキを突破せんとする組織労働者の吉田内閣反動政策に対する一大攻勢である。吉田亡国内閣打倒の日まで、この大闘争のホコをおさめるものでないことを宣言する。

日本労働年鑑 第22集／戦後特集

発行 1949年8月15日

編著 大原社会問題研究所

発行所 第一出版

2000年2月1日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 戦後特集(第22集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
